

『ハヴロック』の関係詞節構造

濱崎 孔一郎

(1997年10月15日 受理)

The Relative Clause Construction in *Havelok*

HAMASAKI Koitiro

1. はじめに

本稿の目的は、ME期の作品である『ハヴロック』(*Havelok*)における関係詞節の構造を Kayne (1994) 等の枠組みに基づいて、検討することにある。この検討を通して、Kayne (1994) で提案されている線状一致の公理 (LCA), 非対称的 c 統御関係 (asymmetric c-command relation) の妥当性を考えてみたい。

本稿の議論は以下のように展開される。まず、第2節で、Kayne (1994) の枠組みに基づいた英語の関係詞節構造の分析の概略を紹介する。次に、第3節で、『ハヴロック』における関係詞節構造を分類しながら、その特徴を代表的具体例を基に検討する。さらに第4節で、前置詞残置に関する考察に基づいて『ハヴロック』における関係詞節構造の特徴を探り、第5節が結論となる。

2. Kayne(1994)

Kayne (1994) は、すべての言語は、たとえVO語順であろうとOV語順であろうと、その構造は2項枝に分かれ (binary branching) し、補部 (complement) は主要部 (head) に後行し、指定辞 (specifier) と付加要素 (adjoined element) は姉妹関係にある節点に先行すると主張する。それゆえ、すべての句構造 (phrase structure) は非対称的 c 統御関係 (asymmetric c-command relation) を構成するとされている。

こういう基本的な考え方に基づいて様々な構文の分析がなされている。その中で展開されている英語の関係詞節構造の分析を紹介し、これに従ってME期の作品である『ハヴロック』の関係詞節構造を考察する手がかりとしたい。

Kayne (1994) では、まず(1)に示すような英語における二重属格 (double genitive) ¹⁾について考察している。

(1) I have two pictures of John's.

(1)において、John's という句は、picture の補部ではない。²⁾ もし補部であるとすれば、(1)の写真 (あるいは絵) は John を写した (描いた) ものとなる。³⁾ また、Kayne (1994) の枠組みでは右

側への付加を認めないので、(1)の *of John's* という句は付加されたものとも考えることはできない。

Szabolcsi (1983) のハンガリー語の所有格構造に関する議論に基づいて Kayne は、*John's two pictures* のような句は、実際には(2)のように音声的に具現されない D を含む構造であると仮定している。

(2) D⁰ [*John* ['s [*two pictures*]]]

ハンガリー語では所有者を示す句が与格を付与されるが、このままの位置では格を付与されないで、Dの指定辞の位置へ移動しなければならないからである。⁴⁾

Szabolcsi (1983) の議論を受けて、Kayne (1994) は、(1)の中の *two pictures of John's* という句について(3)のような構造を提案している。

(3) [*two pictures*]_i [[*D of*] [*John* ['s [*e*]_i]]]

すなわち、*two pictures of John's* という DP は、主要部が *of* で、*two pictures* という句は、*e* の位置から格を受けるために [*Spec, DP*] へ移動したと考えるのである。ここでの *two* のような数詞はもちろんのこと、*every, many, some, any* 等の数量詞 (quantifier) や不定冠詞 *a(n)* は、一般に受け入れられているように、NP あるいは QP の内部で生成され、DP の指定辞の位置へ移動するものと考えられている。他方、英語の定冠詞 *the* は、D⁰ の位置を占める。したがって、*two* の代わりに *the* に置き換えた(4)は非文法的となる。

(4) *?I found the pictures of John's / his.

つまり、定冠詞 *the* は D⁰ の位置になければならないのに、これまでの議論に基づけば、(4)では指定辞位置に生じているためである。また、次の(5)の場合のように、定冠詞 *the* を数詞 *two* の位置へ生じさせることはできない。

(5) *?I found the two pictures of John's / his.

すなわち、定冠詞 *the* は(3)のような句を補部としてとれないということである。一般的にいうと、定冠詞 *the* は、DP を補部としてとれない、ということになる。

以上は、英語の二重属格に関する議論であるが、Kayne (1994) はこの議論をさらに展開して、英語における関係詞節構造へと考察を進めている。次の(5)の例について考えてみよう。

(6) I found the (two) pictures of John's / his that you lent me.

(Kayne (1994 : 86))

(6)の中の *the (two) pictures of John's / his* という句は先の(4)や(5)のような場合とは違って、ひとつの構成素を成していない、と Kayne は主張する。そうではなくて、(two) pictures of John's that you lent me という関係詞節を含んだ句が定冠詞 *the* とは異なる位置を占めると提唱する。つまり、(6)の例は、先の二重属格の議論で得られた結論、すなわち、「定冠詞 *the* は、DP を補部としてとれない」ということを、この場合も確認するものとなっているというのである。

したがって、(two) pictures of John's that you lent me という句の主要部は、(two) pictures of John's の中には存在しない。すると、必然的に (two) pictures of John's that you lent me

という句の主要部は補文標識 *that* ということになる、と Kayne は主張する。すなわち、主要部 *that* の補部は CP である、ということである。では、(two) pictures of John's はどの位置に生じているのであろうか。当然、[Spec, CP] ということになる。ゆえに、(7) のような構造をもつものと考えられる。

(7) [(two) pictures of John's]_i [that [you lent me [e]_i]]

(Kayne (1994 : 87))

すなわち、通常関係詞節の先行詞といわれている (two) pictures of John's は、関係詞節構文の主要部ではなく、関係詞節内の適当な位置から関係節 CP の指定辞 [Spec, CP] へ繰り上げられたという考え方である。⁵⁾

以上、概略を述べたように、Kayne (1994) は DP の場合も CP の場合も、XP 内部から [Spec, XP] への繰り上げが行われていると主張している。Kayne (1994) は、普遍文法 (UG) が一定の整然とした階層構造を成しており、これが線形状に現れると考えている。とすれば、ME 期の作品である『ハヴロック』にもこの分析は当てはまるはずである。したがって、以下の実際に『ハヴロック』における関係詞節構造の分析にこの考え方を応用してみることで、Kayne の主張する言語理論の妥当性が検証できよう。

3. 『ハヴロック』の関係詞節構造

本節では、後の節での詳細な分析を試みるために、まず『ハヴロック』の関係詞節構造の具体例をいくつか提示することにする。⁶⁾

まず初めに、(8) の例を考えてみよう。

(8) a. He was þe wicteste man at nede / þat riden on ani stede (9-10)

"He was the doughtiest man in crisis who had occasion to ride any horse"

b. Was non so bold lou[er]d to Rome / þat durste upon his [londe] bringhe / Hunger ne here (64-66)

"There was not such a temerarious lord as far as Rome that dared bring down on his land hunger nor invasion"

c. Havelok, þat was þe eir (410)

"Havelok, who was the heir"

(8) の例では、いずれも関係詞 *þat* が主格で用いられている。しかし、主格で用いられていることは明らかであるが、性・数・人称・格等による変化はまったく生じていない。

次に、(9) の例をみてみよう。

(9) a. Of a tale þat Ich you wile tell, (3)

"of a tale which I will tell you"

b. Vtlawes and theues made he bynde, / Alle þat he micthe fynde, (41-42)

"he made outlaws and thieves be bound, all that he could find"

c. Of Crist **pat** maude mone and sunne! (436)

"of Christ that created the moon and the sun!"

(9)の例では、関係詞 **pat** が関係詞節内の要素と同じ機能を果たしている。しかし、この場合もまた、性・数・人称・格等による変化はまったく生じていない。

次の(10)は、自由関係詞節 (free relative clause) 構造の例である。⁷⁾ すなわち、いわゆる「先行詞」のない、あるいは「主要部」のない関係詞節である。

(10) a. He wel trowede **pat** he seyde, (382)

"He believed well what he said"

b. And seyde 'Louerd, don Ich haue / **pat** me bede of þe knaue: (668-669)

"And said 'Lord, I have done what you commanded me to do about the boy"

c. Huelok herde **pat** he bad, (1669)

"Havelok heard what he asked"

d. **Hwo** hors ne hauede com gangande, / So **pat** withinne a fourteenith / In al Denemark ne was no knith, (2284-2286)

"Whoever didn't have a horse came walking, so that within a fortnight in all Denmark there was no knights..."

(10a-c)の例では、関係詞として無変化の **pat** が用いられているが、(10d)では **Wh** の複合関係詞が使われている。『ハヴロック』で用いられている関係詞は、ほとんどすべて無変化の **pat** であるが、ごく少数、OE期の *swa hw-swa* の影響を受けた (10d) のような形式の関係詞が存在する。

次の(11)の例は少々特殊な形式をもつ関係詞節構造である。すなわち、本来、関係詞として **pat** が用いられているにも関わらず、関係詞節内に関係詞化されたはずの要素が、いわゆる再述代名詞 (resumptive pronoun) として再び出現している例である。⁸⁾

(11) a. And stirte forth to þe kok / **pat** he bouthe at þe brigge. (874-876)

"And hastened forward to the cook who bought at the bridge"

b. For it ne was non horse knaue, / **pat** he ne kam þider leyk to se. (1020-1022)

"For there weren't any horseboys who didn't come thither to see the sport"

c. Was non of hem **pat** hise hernes / Ne lay þer ute ageyn þe sternes. (1809-1810)

"There were none of them whose brains didn't lie there outside facing the stars"

d. ...and was þer-inne / Sixti winter king with winne, / And Goldeboru quen, **pat** I wene / So mikel loue was hem bitwene (2965-2968)

"and (Havelok) was there for sixty years happily, and Goldeborw was a queen, that, I think, so much love was between them"

(11a) の場合は、先行詞として *þe kok* をとり、主格として機能しているはずの関係詞 **pat** の後に、

改めて代名詞 *he* が繰り返されている。(11b)の場合にも、先行詞として *horse-knaue* をとり、主格としての機能を果たしているはずの関係詞 *þat* の後に、代名詞 *he* が再び現れている。(11c)の場合には、関係詞 *þat* は、先行詞は直前の *hem* であろうが、ここでは属格として機能し、関係詞のすぐ後に属格代名詞 *hise* が生じている。すなわち、*þat* と *hise* のふたつで現代英語の *whose* に相当する。(11d)の場合は、先行詞が *Havelok* と *Goldeborw* の両方を取り、これを受けて、関係詞節内でさらに *hem* が繰り返し出てきている。すなわち、*þat* …*hem* で現代英語の *whom* に対応する。

最後に、興味深い振る舞いを示す前置詞残置 (*preposition stranding*) 構文の例を(12)に示す。

- (12) a. *Weilawei! nis it no korn, / þat men micte maken of bred?* (462-463)
 “Alas! Is there no corn that men can make bread from?”
 b. *Til þat he were of Godard wreken, / þat Ich haue of ofte speken.* (2369-2370)
 “till he was avenged on Godard whom I have often spoken of”
 c. *J shal þrist ut þi rith eye, / þat lokes with on me,* (2726-2727)
 “I shall poke out your right eye, which you gaze at me with”
 d. *And þe hand he dide of-fleye / þat he smot him with so sore* (2752-2753)
 “And he swiftly severed the hand which he struck him so exceedingly”

前置詞残置とは、関係詞が関係詞節内に生じる前置詞の目的語になっている現象を指す。すなわち、後に説明する随伴 (*pied-piping*) が、関係詞の直前に前置詞をとるのに対して、前置詞残置構文では、前置詞は関係詞の直前に現れず、関係詞節内の本来の位置にとどまっている。このことが、どういう帰結をもたらすかについては、次の節で検討する。

4. 随伴と前置詞残置

第3節でみてきた『ハヴロック』で用いられている関係詞節の構造を考えるために、まず随伴と前置詞残置というふたつの現象について、一般的な観点から検討してみよう。

- (13) a. *the man to whom I have given a book.*
 b. * *the man to that I have given a book.*
 (14) a. *the man who(m) I have given a book to.*
 b. *the man that I have given a book to.*

(Auwera (1985 : 172))

前節で簡単に触れたように、前置詞が関係詞化に伴って関係詞と一緒に移動したのが(13)の随伴という現象である。それに対して、(14)では、関係詞が移動しても前置詞は元の位置にとどまったままである。この現象を前置詞残置という。ここで興味深いのは、現代英語で共に関係詞としての機能を果たしている *Wh* 要素と補文標識 *that* では、随伴・前置詞残置に関して、異なる振る舞いを示すという点である。すなわち、(14a, b)に示すように前置詞残置の場合は、*Wh* 要素を用いても補文標識 *that* を用いても、共に文法的であるのに対して、随伴の場合には、(13a)に示すように、*Wh* 要

素は何の問題も生じないが、(13b)に示すように補文標識 *that* が現れると、非文法的になってしまう。これは、補文標識が代名詞性が薄いためではないかと考えられる。

このことは、次の(15)のような例でも確かめられる。

- (15) a. I came the day *that / when / on which* John came.
 b. I saw the place *that / where / in which* John lived.
 c. I don't like the way *that / in which* he mispronounces my name.
 d. This is the reason *that / why / for which* I did it.

(Auwera (1985: 174))

(15)の例は、いずれも *that* が明らかに代名詞ではない要素、すなわち関係副詞の生じる環境に生じている。もし、*that* が関係代名詞として機能しているのであれば、このような環境で生じるはずはないであろう。

先の(13)と(14)の随伴・前置詞残置に関するデータからも *that* は代名詞ではない、あるいは、代名詞性がきわめて弱いということが導かれよう。この考察は、必然的に『ハヴロック』で用いられている関係詞 *pat* も、代名詞ではない、あるいは代名詞性がきわめて薄いという結論に至るものと考えられる。というのも、『ハヴロック』で用いられている関係詞 *pat* は、現代英語や OE 期の関係詞節構造で用いられる *that* や *pe* と同じく、補文標識であるといえよう。⁹⁾ したがって、『ハヴロック』の関係詞節構造は、CP を構成しているものと考えられる。

5. むすび

第2節で概略を述べた Kayne (1994) による英語の関係詞節構造の分析は、[DP D⁰ CP] という形をとる。¹⁰⁾ すなわち、いわゆる先行詞とそれに続く関係詞節は構成素として切り離された要素ではなく、同じ DP 内の構成素とみなされる。そして、いわゆる先行詞は、CP 内部から [Spec, CP] 位置へ繰り上げられたものと想定される。すると、UG の普遍的構造として、英語の歴史を通じて首尾一貫して同一の構造が存在したことになり、特定の特殊な構造を仮定する必要がなく、これは自然な結論であると思われる。¹¹⁾

注

- 1) Kayne (1994: 85) では *postnominal possessive* と表記されているが、「二重属格 (*double genitive*)」という呼称の方が一般的なもので、ここではこちらの呼び方を採用する。なお、以下の議論の詳細については Kayne (1994: 85-86) を参照のこと。
- 2) 補部と付加詞 (*adjunct*) の句構造上の違いについては、Radford (1988: 175-79) および Haegeman (1991: 78-84) を参照されたい。
- 3) *picture* の補部として例えば、*Mary* を補うと、この句は *two pictures of Mary of John's* のような表現になる。Kayne (1994: 85) を参照。
- 4) 格付与 (*Case assignment*) という考え方は、Chomsky (1981) から Chomsky (1986) までのいわゆる GB 理論の考え方であるが、これは、Chomsky (1991, 1993, 1995) のミニマリスト・プログラムの枠

組みでは指定辞と主要部との一致による格照合 (Case checking) へと発展している。しかし、ここでの議論に直接関わってこないで、ここではこれ以上立ち入らないことにする。

- 5) この考え方は、制限関係詞節の繰り上げという Vergnaud (1974) の考え方が基本的に正しいものであると Kayne は主張する。
- 6) 後に本文で触れるように、前置詞残置構造以外は代表的なものだけを任意に取り上げてある。前置詞残置構造については、後に節を改めて詳しく論じることにする。
- 7) 自由関係詞は、もともと OE 期の *se-be* に由来し、本来は代名詞を先行詞としていた。しかし、その後 *se* が脱落し、先行詞を失った形となり、歴史的な変遷を経て、*swa hw-swa* の影響を受け、ふたつの *swa* がさらに脱落した後、強調の副詞 *ever* を添加したものである。
- 8) 次の (i) と (ii) の例が示すように、現代英語にみられるは、関係詞とその痕跡 (trace) とその間に、何らかの要素が挿入されたり、あるいは、いかなる要素が挿入されていなくても距離が長い場合に生じることが多いようである。したがって、ここでの代名詞は再述代名詞ではなく、OE 期にみられる指示代名詞と不変化子 *be* による関係詞節構造の名残なのかもしれない。しかし、いずれにせよ、代名詞性の希薄な *pat* を補うための役割を担っているということは確かであると思われるし、ここでの議論に直接関わってこないと思われるので、これ以上はここでは立ち入らない。
 - (i) He's just the kind of fellow *that*, if everyone leaves him alone, *he'll* be content with five-and-twenty shillings for the rest of his life.
 - (ii) That's the problem *that* I asked you to find out from Fred about *it*.

(Auwera (1985 : 155-56))
- 9) OE 期の関係詞節構造で用いられている *be* , ME 期の関係詞節構造で用いられている *pat* , 現代英語の関係詞節構造で用いられる *that* は、いずれも補文標識であり、英語の歴史的発達を通じて首尾一貫した構造が保たれていたという議論については、濱崎 (1990) を参照されたい。
- 10) 詳しくは、Kayne (1994 : 87) を参照のこと。
- 11) ただし、冠詞が現代と比べて OE 期には十分確立していなかった点を勘案すると、D の要素の成熟度については歴史的にみて差があったと考えられる。

一次資料

Smithers, G. V. (1987) *Havelok*. Oxford: Clarendon Press.

参考文献

- Auwera, J. van der (1985) "Relative *that*: A Centennial Dispute," *Journal of Linguistics* 21, 149-79.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in R. Friedin (ed.) *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, 417-54. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1993) "The Minimalist Program for Linguistic Theory," in K. Hale and S. J. Keyser (eds.) *The View from Building 20*, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Haegeman, L. (1991) *Introduction to Government and Binding Theory*. Oxford: Blackwell.
- 濱崎孔一郎 (1990) 「英語における CP 節点の歴史的考察：特に関係詞節構造について」『岐阜女子大学紀要』第19号, pp. 133-41.
- 濱崎孔一郎 (1993) 「名詞句の構造について」『鹿児島大学教育学部研究紀要—人文・社会科学編』第44巻, pp. 95-103.

- Kayne, R. S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Mass. : MIT Press.
- Radford, A. (1988) *Transformational Grammar: A First Course*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Szabolcsi, A. (1983) "The Possessor that Ran Away from Home," *The Linguistic Review* 3, 89-102.
- Vergnaud, J. -R. (1974) *French Relative Clauses*. Doctoral dissertation, MIT.